

国立大学法人岡山大学・株式会社林原
SDGs産学パートナーシップに関する協定書調印式



協定書を手に固く握手を交
わす横野学長と安場社長



2020年8月19日の協定書調印式には関係者が多く集まった

座談会会場:ムラタアカデミア
岡山大学津島キャンパス中央図
書館2階にある岡山県産のヒノキ
を使用し、森をイメージした交流ス
ペース。『株式会社岡山村田製作
所』とネーミングライツ・パートナー
契約を締結し、「ムラタアカデミ
ア」の愛称が付けられた。

株式会社林原
竹本圭佑
経営デザイン室長

株式会社林原
安場直樹
代表取締役社長

国立大学法人岡山大学
横野博史
学長

国立大学法人岡山大学
横井篤文
上席副学長・ユネスコチェアホルダー

また、岡山の産業界の賛同が、第一回「ジャパンSDGsアワード」特別賞の受賞にもつながったと思います。

安場 深層心理で「この人は信頼できる」という所がないとパートナーシップは難しい。だけど、横野学長とは、お互いの価値の源泉がすごく一致していると実感しました。

横野 安場社長と話して感心したのは、サイエンスに対する真摯な思いを持ち続けたまま経営されている。「岡山大学と一緒に研究開発するんだ」という安場社長のわくわく感が社員にも伝わっていて、意気投合したんですよね笑。

竹本 いっぽうで、今回の産学パートナーシップは、あえて遠回りをして、『林原』と『岡山大学』の互いの考え方や研究を紹介し合うことから始めて、対話を重ねながら徐々に共通の課題を絞り込むという、地道なプロセスを歩んできましたね。

横井 まず、私たちは何者で、何をするのか、強みは何かということ、社会や市民を主語としてナラティブに語っていく。ありがたい未来から歴史も振り返りつつ、今日から共にしていきたいことを共に創造していくプロセスが大切です。今、世界の潮流は資本主義から「志本主義」へ。「志」を同じくする人と組織が連携し、重要課題とプロジェクトを選定し、限られたリソースの最適化をはかることで、業績と社会的インパクトのシナジーを高めていくことが求められています。

なぜ、『岡山大学』と『林原』なのか。

安場 『林原』が二〇二〇年六月に発表した「サステナビリティ方針」は、横野学長との会話から生まれたと言っていると思います。二〇二二年に「NAGAS Eグループ」の一員となり、岡山発の国際バイオ企業として次のステップを模索していた時に出会ったのが「サステナビリティ」、そして、SDGsに取り組み『岡山大学』でした。

竹本 二〇一八年に当社は、スイスのライフサイエンス企業「ロンザ社」と長期パートナーシップ契約を結び、植物由来カプセルの原料となる天然多糖類「プルラン」を安定供給することになりました。その当時は、正直申しまして、SDGsへの理解は高くなかったです。その後、『岡山大学』との対話を通じて『林原』が続けてきた事業がSDGsと親和性が高いことを認識しました。

横野 私が二〇一七年に学長に就任した時、しなやかに超えていく「実りの学都」へ」という「横野ビジョン」を掲げました。学部や研究科、国際機関等、様々な垣根を超えて成果を社会に還元し、世界に輝く「実りの学都・岡山」の形成を目指しています。国連の機関とつながり、「SDGs」を推進することで世界の一流研究機関と交流する機会も得ました。

岡山から世界へ！

オープンイノベーションで共に創るミライ

岡山市を拠点とする国際バイオ企業「林原」と、国連からアジア唯一の「ユネスコチェア」（持続可能な開発のための研究と教育）認可を受けている岡山大学は、SDGs（持続可能な開発目標）達成に貢献するため、二〇二〇年八月「九日」SDGs産学パートナーシップに関する協定」を締結。以来、共同研究や研究開発者の交流といった産学連携を深め、地球規模の課題にアプローチしている。岡山から世界を見つめる両者が、それぞれの思いと今後の展望を語り合った。



岡山のため、世界のため、 そして、人間のため。

横野 「林原」では、社員のSDGs認知度が九〇%を超えているそうですね。**竹本** 経営陣も社員も「地球も人もよりよい未来に」という気持ちに素直に向かえたのは、当社の「SDGsアドバイザー」に就任いただいた横井副学長の存在が大きいです。とりわけ大きな気づきだったのが「SDGsウエディングケーキモデル」でSDGsの概念を教えていただいたこと。経済は社会に、社会は地球環境に支えられている、という全体像が見せられて初めて、経営陣が全員「はっ！」と驚いた。

「地球が傷んでいるからSDGsをやるんだ」「地球という土台の上に経済があるんだ」と気付けたんですね。**横野** 昨年、眞鍋淑郎先生がノーベル物理学賞を受賞されました。大気中の二酸化炭素の濃度が上がると地表の温度が上がることを物理学の法則に基づいた数式で表された眞鍋先生の受賞に象徴されるように、地球環境を守らないと人間が生息できる環境も守れないことが広く認知されてきました。新型コロナウイルスなど動物が媒介する感染症の原因のひとつが、森林伐採に



横野 博史(まきの ひろふみ):岡山市生まれ。岡山大学医学部医学科卒業。同大学第三内科入局。1996年・岡山大学医学部教授、2009年・岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長、2011年・岡山大学病院長を経て、2017年より第14代となる岡山大学長を務める。

よって住処を追われた動物の都市部への移動です。地球の健康「プラネタリーヘルス」は、われわれ人間の健康と直結しています。

横井 「プラネタリーヘルス」と、「林原」の強みである「食」の分野は、かなり密接にかかわっています。「林原」は昨年九月の「国連食料システムサミット二〇二二」で持続可能な食料システム実現と栄養価の高い食品開発促進に関するコミットメントを表明されました。地球の健康は、まず「食」から。気候変動の観点から、私たちは原料から廃棄まで、「食べる」という行為を徹底的に、全世界的に見直していかなければならない。そういう意味

でも「林原」の動きは国内外で注目を集めています。「プラネタリーヘルス」を目指す本学との連携はとても時宜を得たものだと思います。

安場 『岡山大学』の若い研究者の考え方や価値観と、われわれの知見や技術データが融合することで、何か新しいものが生まれてこないか、すごく期待しています。従来のように企業が大学にテーマを持ちかけると利益がかかわってしまつけれど、そうではなく、学生・大学・地域が何を課題にしているのか、そこを根本的に探ってみたい。そこから「林原」が進むべき道や、課題解決への光が見えてくるんじゃないかと考えています。



安場 直樹(やすば なおき):三重県生まれ。神戸大農学部卒業。1986年・住友商事ケミカル入社。外資系企業3社で事業戦略・営業キャリアを積み、2012年に長瀬産業入社。2014年・ライフ&ヘルスケア製品事業部長、2015年・同社執行役員、林原取締役を兼任。2018年より現職。

「共育共創」。力を合わせて 地球の健康課題に挑む。

横野 二〇二二年度から本学が掲げる「岡山大学ビジョン三・〇」は「ありたい未来とともに育み、ともに創る研究大学」です。志をともにしているところと、ともに人材を育成し、ともに創る。社会に新たな価値として発信する。そこに、「岡山大学」の存在意義があるのではないかと考えています。

横井 「共創」はひとつの大きなキーワードです。今までは国際競争の時代でしたが、これからは国際協調の時代。今、世界や若い人たちの、商品を選ぶ視点や思想が変わってきています。営

利ばかり追いかけていたらユーザーにも投資家にも見放されてしまいます。大学にも企業にも「ともに創る」視点が求められます。

竹本 私も、岡山に期待することは「共育」と「共創」です。岡山という都市の一番の可能性も、ここだと思います。**横井** 大学の「知」には大別してふたつあると思います。ひとつは、社会にすぐ役立つ目的遂行のための「知」。もうひとつは、その社会を捉え直すための、新しい価値を創造する「知」です。近代文明に歪みが出てきている今、

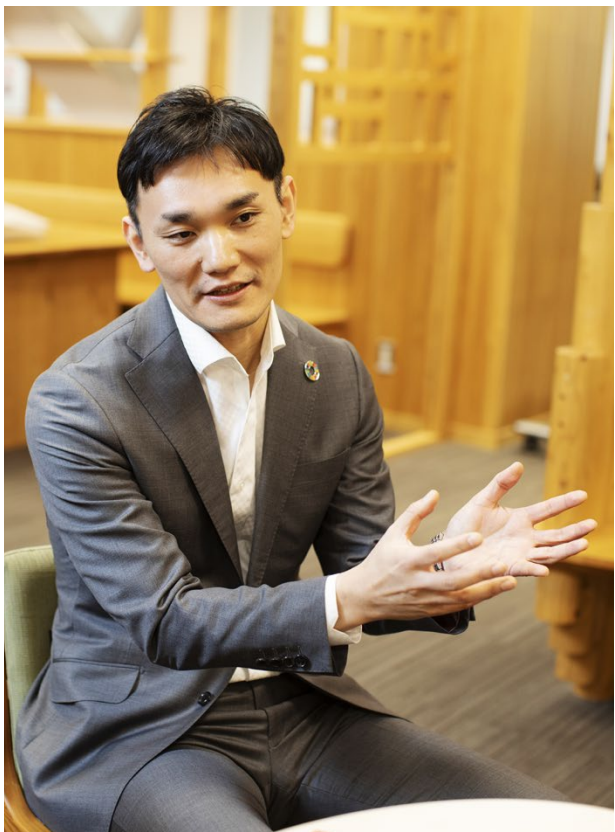
新しい価値を創造する「知」が大切です。その新たな価値観あるいは「地球社会のための」といった精神性を踏まえて、産学連携による知の社会実装を推進し、残された地球規模の課題解決に貢献できると思います。

横野 岡山には課題解決型の遺伝子が流れていると思っています。岡山藩主・池田光政も、陽明学や熊沢蕃山による実学を重用しました。さらに、津山藩の洋学を源流とする蘭学から派生した岡山藩医学館。これらが、『岡山大学』の起源でもあります。

横井 「不易流行」ですよね、本質は忘れずに新しい変化を重ねていく姿勢。持続的に発展するものが生きながらえる。**安場** おっしゃる通りですね。「林原」

はSDGsの本質を追求したうえで経営していますが、私たち企業には、どこかに営利を求めなくせがあるため、どうしても視野がせまくなる。総合大学である『岡山大学』のさまざまな学部によって来るいろいろな考え方やアプローチの仕方、価値観を共有したいと思っています。

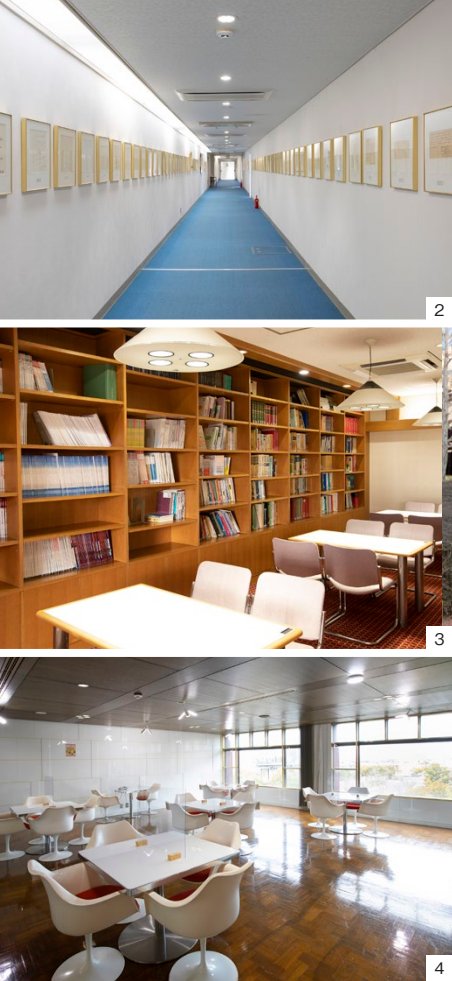
横野 コロナ後は地方の時代、「地域循環共生圏」の時代ではないでしょうか。「林原」をはじめ、岡山に多様なフィールドや拠点があることは、『岡山大学』にとってもありがたい。こういった「林原」との共育共創を世界に発信することと、世界から『岡山大学』や「林原」を目指して「岡山に勉強に来たい」という人が増えることを願っています。非常に、いい循環が生まれますよね。



竹本 圭佑(たけもと けいすけ):長崎県生まれ、東京都出身。慶應義塾大学経済学部卒業。メーカーや監査法人、長瀬産業にて財務会計分野でのさまざまなプロジェクトを牽引。2016年に林原に入社(長瀬産業からの出向)、経営戦略立案を中心に従事。2021年より現職。



横井 篤文(よこい あつふみ):神奈川県生まれ。2015年・岡山大学上級グローバル・アドミニストレーター、2017年・副理事、2018年・副学長(海外戦略担当)を経て、2021年より現職。2019年よりユネスコチェアホルダー「持続可能な開発のための研究と教育」も務める。



1. 重厚なレンガ造りの建物が目を引く「藤崎研究所」。 2. 『林原』を訪問した、国内外の著名人たちが記した貴重な色紙の数々を通路に掲示。 3・4. 研究者らのミーティングや休憩に利用されるスペース。



数々のアイデアをもとに、日々試行錯誤が行なわれている研究室。

原料を用いながらも、石油由来の素材と同等の機能を持つ新素材を作りたいという『林原』の思いに応えるべく、一緒に技術を解き明かしながら何か面白いものを作っていきたいと考えています。また、この貴重な経験は、これから社会に出ていく学生たちにとって企業の考え方や時間の使い方の学びにもなるはずです」と言葉に力を込める。さらに、小野教授が研究を進める「マイクロ化学プロセス」を用いると、製造場所も移動できる小さな工場で消費エネルギーや生産コストを抑えながら、価値あるものを必要な量だけ生産できる可能性をも秘めているという。

SDGs 達成を目指す『林原』と『岡山大学』による産学連携から、世界に誇れる新たな価値が、ここ岡山から生まれることを大いに期待したい。

岡山大学での学びを生かし、農業に関わる課題解決に挑戦。

『林原』入社2年目のアンニサさんは、オープンイノベーションプロジェクトメンバーのひとり。かつて、出身地・インドネシアで開催された学会で、岡山大学教授の講演内容に心動かされて来日。その後岡山大学資源植物科学研究所へ進学し、5年間、農学分野で研究を深めた。入社後は農業に関する新事業の研究に携わっているという。「このプロジェクトで、大学時代に身につけた植物に関する知識やソフトスキルを生かし、農業が抱える社会課題の解決にチャレンジしたい」と意欲的に語った。



オープンイノベーションプロジェクトのメンバーと『岡山大学』の小野努教授、ゼミ生ら。



オープンイノベーションを通じて、世界に誇る新たな価値創出へー。

「当社がオープンイノベーションに積極的に取り組むのは、自分たちの技術だけでは難しい研究開発に対して、外部に有効な技術を求めることで、課題解決や社会貢献につながる新たな価値を創出するためです。それとともに、技術領域や価値観の異なる外部の人との対話を通じて、社内の人材育成を図りたいという思いもあります」。こう語るのは、『林原』の「オープンイノベーションプロジェクト」の責任者である山本晃隆常務。

「当社がオープンイノベーションに積極的に取り組むのは、自分たちの技術だけでは難しい研究開発に対して、外部に有効な技術を求めることで、課題解決や社会貢献につながる新たな価値を創出するためです。それとともに、技術領域や価値観の異なる外部の人との対話を通じて、社内の人材育成を図りたいという思いもあります」。こう語るのは、『林原』の「オープンイノベーションプロジェクト」の責任者である山本晃隆常務。



常務取締役、研究・技術部門長、オープンイノベーションプロジェクト責任者でもある山本晃隆氏。

「当社がオープンイノベーションに積極的に取り組むのは、自分たちの技術だけでは難しい研究開発に対して、外部に有効な技術を求めることで、課題解決や社会貢献につながる新たな価値を創出するためです。それとともに、技術領域や価値観の異なる外部の人との対話を通じて、社内の人材育成を図りたいという思いもあります」。こう語るのは、『林原』の「オープンイノベーションプロジェクト」の責任者である山本晃隆常務。



オンラインや対面でのミーティングを定期的実施。プロジェクトの進捗状況の確認と課題出しなどを行なう。



地域のパートナーとの活動を通じて 人々の暮らしを豊かにする『林原』。

創業以来、人々の健康や幸せに役立つ素材の研究開発・製造・販売を続けている『林原』は、二〇三〇年のSDGs達成を見据えて独自のサステナビリティ方針を掲げ、四つの重点課題「健康寿命延伸への貢献」「安定的な食料確保」「社員エンゲージメントの向上」「環境負荷の低減」に対する取り組みを強化している。

その一環として二〇二一年一〇月八日（トレハロースの日）に、岡山市、岡山県菓子工業組合青年部、株式会社明治、株式会社長谷井商店、岡山医療生活協同組合と共同で、健康啓発イベント「フレイルを知る一日」をみんなが元気な暮らしを応援しよう」をJR岡山駅で開催。『林原』の主力製品であり、高齢者のカロリー補給食や医薬品にも使われるトレハロース「トレハ®」の紹介を通じて、メタボと並んで注意が必要な状態「フレイル」（加齢による虚弱）の認知拡大を図るとともに「STOPフレイル」のメッセージを発信。健康寿命延伸の大切さをアピールした。

「トレハ®」は、でんぷんを主原料とする自然由来の糖質。食感の持続や品質維持にも役立つ甘味料として、多くの菓子や食品に使用されている。現在「岡山」の銘菓をつなぐトレハの輪」と題し、「トレハ®」が使われている岡山銘菓三七製品を路面電車のつり革広告でも紹介。岡山の人々になじみ深い菓子を通じて「トレハ®」の認知度を高めるとともに、岡山の菓子業界を応援する活動を行なっている。

近年、「トレハ®」は、たん白変性抑制、冷凍耐性などさまざまな機能や、自然由来という特性で注目され、用途の拡大が進行。フードロス削減へのアプローチも期待されている。『林原』は今後も、この「トレハ®」を活用し、人々の健康とSDGs達成に貢献していくとしている。



4.「10(ト)0(レ)8(ハ)」の語呂合わせで「トレハロースの日」(日本記念日協会登録)に制定された10月8日に、JR岡山駅2階東西連絡通路と西口広場でイベントを開催。
5.協力企業による健康チェックや商品PRブースが並んだ。
6.「トレハ星人」がJR岡山駅構内のデジタルサイネージをジャック。7・8.岡山県菓子工業組合青年部による、「トレハ星人」をモチーフにした創作和菓子を会場のみで限定販売。

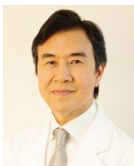


1.路面電車のつり革広告で「トレハ®」が使われている岡山銘菓を紹介。2.「岡山桃太郎空港」内でもポスターを掲出。3.岡山銘菓37品を掲載。つり革広告を活用したポスター。

地元のパートナーのみなさんと一緒に、セミナーを開催！ 口から始める全身の健康 うるおいアップで元気に長生き！

話す、歌う、噛む、飲み込む、笑うなど、私たちは日常、知らず知らずのうちに口をたくさん使って生活しており、その機能を落とさないようにすることは健康で長生きをするためにはとても重要なことです。実は「口を健康に保つことで全身の“うるおい”をキープして老化を予防する」ことができます。今回のセミナーではドラマウスの現状や抗加齢（アンチエイジング）医学の最前線について紹介するとともに、超高齢社会に求められる「うるおい」の重要性についてご紹介します。

さいとう いちろう
講師 | 斎藤 一郎 先生



1954年、東京生まれ。鶴見大学歯学部教授。2008年より4年間、鶴見大学歯学部附属病院の病院長を務め、現在も外来を担当。日本抗加齢医学会の理事。

第4回林原ライフセミナー 「口の健康、アンチエイジング」

主 催：株式会社 林原
開 催 日：2022年3月7日(月)
開催時間：13:30～16:10
開催場所：山陽新聞社「さん太ホール」
募集人数：先着150人(会場参加)
後日オンライン配信あり

聴講申込



(会場参加) (後日オンライン配信) ※詳しくは、「林原」のHP、または、「第4回林原ライフセミナー」で検索

トレハ星人

『林原』のPRキャラクターを務めたのち、しばらく地球を離れていたが、2019年10月8日「トレハロースの日」に帰還。同時に、林原の宇宙広報マネージャーに就任。本名はステファノ・グーグルアイ三世。トレハ星人出身の59歳。Twitterで日々メッセージをつぶやいている。



STOP フレイル 「フレイル」って知ってる？

健康と要介護の間にある虚弱な状態を「フレイル」と呼んでおるんじや。早期発見・対策で健康な状態に戻る可能性もあるんじやよ。
フレイル予防 3つのポイント 1.栄養 2.運動 3.社会参加
『林原』は「栄養」の面からフレイル対策をサポートしておるんじや！